

## パレスチナ赤新月社医療支援事業（ガザ）リモート支援

看護係長 川瀬 佐知子

派遣期間：2022年7月～派遣中

派遣地：イスラエル パレスチナ自治区・ガザ

パレスチナ赤新月社と日本赤十字社の2国間事業として、2019年よりパレスチナ自治区・ガザにあるアルクッズ病院に対し、医療支援を行なっています。開始当初はガザに看護師を派遣し、現地で支援を行なっていましたが、コロナウィルスの流行、現地の治安悪化により2020年以降オンラインでのリモート支援を行なっています。私は2022年7月から当事業に携わり、毎週木曜日に現地スタッフとオンラインでつなぎ、事業について協議を行なっています。事業の進捗や課題について報告します。

当事業では、アルクッズ病院の看護ケアの質の向上を目的とし、①看護プロトコルの作成、②ワークショップの開催、③看護技術のOJT(on the job training)を主な活動内容とし、現地スタッフと共に取り組んでいます。看護プロトコルの内容は「バイタルサインの測定」「酸素投与」「投薬」「輸血」などで、看護師であれば誰しも行う看護技術です。すでに9つの看護プロトコルを作成し、80人以上の看護師を対象にワークショップを開催しました。

11月初めには新たに雇用された15名に対し、3日間のワークショップを開催しました。ワークショップではそれぞれの看護プロトコルについて座学、デモンストレーション、グループワークなどを行います。資料や血圧計などの資器材、アンケートの作成、場所や講師の調整など、現地スタッフは様々な準備に追われていました。私もリモートでできる準備を探し、なんとか無事にワークショップが開催できました。

ワークショップではIT技術を駆使(?!?)し、オンラインで私も参加しました。現地スタッフが適宜パソコン画面の向きを変更し、現場の様子を共有してくれました。しかし、2日目の正午ごろに突然画面共有が停止し、待機していたところ、30分程度で画面が写りました。イスラムのお祈りの時間になったため、参加者が会場を離れたとのことでした。翌日にはお祈りの時間を配慮したスケジュールに変更されており、現地スタッフの柔軟性や調整能力に感銘を受けました。

オンラインではありましたが、生き活きとプレゼンをする講師や積極的に意見交換を行う参加者の様子を画面越しに見ることができました。アンケートでも「実践にそった研修で、現場で使える技術が学べた」「ぜひ今後も続けてほしい」など、前向きな意見があり、事業の意義を感じることができました。



現在は、時期ワークショップの開催に向けて、「創傷処置」「中心静脈カテーテルの管理」のプロトコルを作成しています。しかし、政府の方針変更により多数のシニア看護師の離職、新人看護師の雇用があり、現在はほとんど作成が進んでいません。年末まではさらなる看護師の離職が予測され、現場への影響が懸念されます。

コロナウィルスの流行は落ち着きつつありますが、イスラエルとの衝突により多数の負傷者が出るなど、治安は安定しているとは言えません。現地への派遣がいつ再開されるのかまだ見通しは立たず、しばらくはリモートでの支援が続きます。1日も早く治安が安定し、現地の方々に平穏な日々が訪れることを願いながら、リモートでできることを模索し、精一杯取り組んでいきたいと思っています。

今後も日本赤十字社の活動に、ご支援よろしく申し上げます。

